令和5年度　鹿屋中央高等学校入学試験問題

国　語

注　意

1　監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2　問題用紙は表紙を入れて八ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
3　受験番号は、解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。
4　答えは、問題の指示に従って、**すべて解答用紙に記入しなさい。**
5　監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

受験番号	

1

次の1・2の問いに答えなさい。

1　次の――線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書け。

(1) 電車でコキョウへ帰る。　(2) 机を二つナラべる。

(3) 自動車を船でユソウする。　(4) 文章の内容が曖昧だ。

(5) 自分の力不足を嘆く。　(6) 業務を遂行する。

2　次の行書で書かれた漢字を楷書で書いたときの総画数を、漢数字で答えよ。

縱

2

次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

インスピレーションが湧きやすい相手がいる。誰とでも湧くわけではない。自分はこの相手と話しているときにアイディアが湧きやすい、と思える相手を見つけ、関係を深くしていくと、人生が豊かになる。新しい意味が生まれる瞬間を味わうのは、人生の醍醐味だからだ。受け手の対話力が、触発力となる。

テニスの上手な人やキャッチボールの上手な人を相手にすると、気持ちよくできる。自分が上手くなったような気がしてくる。すると、どんどんプレーがよくなり、自分でも思いがけないよいパフォーマンスが生まれる。これは対話でも同じだ。対話力がある人と話すと、アイディアが生まれやすい。そうした人を会話のパートナーにして、クリエイティブな対話の感覚を積み上げていくことが、コミュニケーション力向上の王道である。

---

①コミュニケーションが深まっているときは、相手とだけではなく、自分自身と対話している感覚がある。すぐに言語化できる事柄だけを話しているのでは、浅い会話になってしまうものだが、自分の中に埋もれている暗黙の知を掘り起こしながら対話することで、深い対話ができるのだ。自分の中に眠っているものを掘り起こすのは、精神的に労力を必要とする作業だ。

文章を書くという作業は、自分自身と対話する作業である。自分でも忘れていることを思い出し、思考を掘り下げる。長い文章を書いたことのある人ならば、それが苦しく充実した作業だということを知っている。日記をつけるという行為も、自分自身と向き合う時間をつくることになる。言葉になりにくい感情をあえて言葉にすることによって、気持ちに整理がついていく。言葉にすることによって、感情に形が与えられるのだ。

②対話を深めるための工夫として、自分自身と対話する関係を対話中にもつくるということがある。意識の全体量を十とすると、相手とのその場の会話に十使ってしまうのでは、浅い会話になる。そこで、半分の五を自分自身への問いかけに使ってみる。慣れないうちは、相手への意識と自分への意識の二つを両立させることが難しいかもしれない。そのために会話が途切れ途切れになることもあるだろう。[a]、そうした練習期間を経ることによって、自分自身と対話する構造を対話に組み込むことができるようになるはずだ。

私はさまざまな領域の人と対話する機会がある。そんななかで、相手が言葉を探しているときが、よくある。私の投げかけた問いに対して、真剣に答えようとして、自分の感触にぴったりとした言葉を探している時間だ。逆に、そうした時間をまったく持たず、現在流れている会話の流れをひたすらつないでいるだけの会話もある。自分自身の経験全体に

常に向き合い、相手から来る言葉の刺激をその経験全体に一度及ぼし、そこから出てくる感触を言葉にしてみる。この精神の作業は、慣れてくれば比較的短い時間でできるようになる。だが、語彙（ボキャブラリー）があまりに少ないと、微妙な感覚を言葉にしにくい。[b]、言葉をむやみにこねくり回してしまう場合は、自分の感触への問いかけが足りないケースである。

伝え合うのは意味である。その意味は、心の感触とともにある。ちょうどいい言葉が見つかったときに、「そうそう、ちょうどその言葉がぴったりだ」という感触を得る。③先に感触があるのだ。何となく捉えたその感触を手探りで言葉にしていく。言葉にしにくい「心の感触」をあきらめずに辛抱強く持ち続ける精神的な強さが、深い対話をもたらす。

相手と話している文脈は維持しながらも、自分自身の経験知の深みに降りていく。この二つの作業を同時に行う能力が、対話力である。④さらに、より高いレベルの対話力とは、相手の経験世界にまで思いを馳せることだ。相手が自分自身の経験を振り返り、微妙な心の感触を言葉にする作業を促し、それにつき添う。自分自身に向き合う習慣のない人もいるが、こちらからの質問によっては、そうした人も自分自身の経験に深く入っていく。海中に潜ってアワビや真珠をとってくる海女さんのように、自分の経験世界に潜っていく。そうした作業を助ける対話力というものがあるのだ。対話に参加している者が皆、自分自身の経験世界に碇を降ろし、一方で文脈の流れをつないでいる。それがコミュニケーションの優れた形なのである。

（齋藤孝『コミュニケーション力』による）

1　本文中の [a]・[b] にあてはまる語の組み合わせとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　（a　しかし　b　また）　イ　（a　つまり　b　ならば）
ウ　（a　ただし　b　だが）　エ　（a　よって　b　もっとも）

2　次の文は、――線部①について説明したものである。[Ⅰ] には最も適当な十字の言葉を、[Ⅱ] には最も適当な七字の言葉を本文中から抜き出して書け。（句読点も一字と数える。）

すぐに言葉にできる事柄だけを相手に話すのではなく、自分の思考の中に [Ⅰ] を探りながら対話をするという、精神的に [Ⅱ] 作業を行って、自分と向き合っているということ。

3　――線部②とはどのようにすることか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　対話を進める中で、自分が相手の話に耳を傾けるだけではなく、自分の話を相手に聞いてもらえるように努力すること。
イ　対話する自分の意識を相手に向けることよりも、自分自身の経験に深く入り込んで感情を言語化するよう努力すること。
ウ　対話を進める中で、日記をつけるときのように、自分自身の話をしっかりと記憶しながら話せるように努力すること。
エ　対話する自分の意識を、会話の流れをつなぐことにだけではなく、自分自身への問いかけに向けようと努力すること。

4 ――線部③とはどのようなことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア ちょうどその言葉がぴったりだ、という感触が先にあり、そのあとに、言葉にしにくい心の感触が生じてくるということ。

イ 伝え合うのは意味である、という感触がまずあり、その感触を手探りで言葉にしていくうちに、適切な言葉が生じるということ。

ウ 言葉にしがたい心の感触が先にあり、なんとか言葉にしようとする中で、ぴったりの言葉が見つかる場合があるということ。

エ 何となく捉えた感触よりも、ちょうどいい言葉が見つかったという感触のほうを強く感じることのほうが多いということ。

5 次の文は、═══線部のように筆者が考える理由について、――線部④の内容をふまえて説明したものである。□ に入る適当な言葉を、「アイディア」という言葉を使って六十字以内で書け。

対話力がある人は、□ から。

---

3 次の文章を読んで、あとの**1**～**4**の問いに答えなさい。

応長(注)の比、伊勢国(注)より、女の鬼になりたるを率てのぼりたりといふ事ありて、その比廿日ばかり、日ごとに、京(注)・白川(注)の人、鬼見にとて出で惑ふ。「昨日は西園寺(注)に参りたりし①」、「今日は院(注)へ参るべし」、「ただ今は、そこそこに」など言ひ合へり。まさしく見たりと言ふ人もなく、そらごとと言ふ人もなし。上下ただ、鬼の事のみ言ひやまず。

その比、東山(注)より安居院(注)辺へ罷り侍りし②に、四条(注)よりかみさま(四条通りより北の方の人)の人、皆、北をさして走る。「一条室町(注)に鬼あり」とののしりあへり③。今出川(注)の辺より見やれば、院の御桟敷(注)のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやく跡なき事にはあらざめりとて、人を遣りて見するに、おほかた逢へる者なし。暮るるまでかくたち騒ぎて、はては闘諍おこりて、あさましきことどもありけり。

その比、おしなべて、二三日人のわづらふ事侍りしをぞ、「かの鬼④のそらごとは、このしるし(前兆)を示すなりけり」と言ふ人も侍りし。

（兼好法師『徒然草』による）

（注）応長＝花園天皇の時代の年号（一三一一～一三一二年）。
伊勢国＝現在の三重県。　白川＝京都の東にある地域。
西園寺・東山・安居院・四条・一条室町・今出川＝いずれも、京都にある建物や地名。
院＝上皇の御所。　御桟敷＝上皇が祭を見物するための建物。

1 ――線部①「参りたりし」、②「罷り侍りし」の主語はそれぞれ誰か。その組み合わせとして正しいものを次から選び、記号で答えよ。

ア ① 鬼　② 人々　**イ** ① 人々　② 鬼
ウ ① 鬼　② 筆者　**エ** ① 筆者　② 上皇

2 ――線部③「ののしりあへり」を現代仮名遣いに直して書け。

3 ――線部④とあるが、鬼の流言は何の前兆だったというのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 二、三日人がうそを信じたこと。
イ 二、三日人が病気にかかったこと。
ウ 二、三日で人の病気が治ったこと。
エ 二、三日で鬼が去ってしまうこと。

4 次は、本文をもとにして話し合っている先生と生徒の会話である。[Ⅰ]～[Ⅲ]に適当な言葉を補って会話を完成させよ。ただし、[Ⅰ]には二十字以内でふさわしい内容を考えて現代語で答え、[Ⅱ]には四字、[Ⅲ]には五字で本文中から最も適当な言葉を抜き出して書くこと。

先生　鬼について、いろいろなうわさが流れたにもかかわらず、鬼を[Ⅰ]いなかったのですね。そして、身分が高い人も低い人も皆、鬼のうわさを言うばかりでした。

生徒A　[Ⅱ]に鬼が出たというううわさが立ったときは、[Ⅲ]の周辺は、人が通れないほど混雑していたのですね。

生徒B　それだけ、人々が興奮していたということがわかりますね。

4

次の文章を読んで、あとの**1**～**5**の問いに答えなさい。

琴葉（ことは）は中学二年生。父は町工場「佐々川（ささがわ）精密工業」の三代目社長。十七歳の天馬（てんま）はこの工場に住み込みで働いている。琴葉が友達と遊んで帰宅した七時すぎ、工場の明かりがついていた。

「天馬……、まだいたの？」

顔を見て、ほっとする。

天馬が機械をひとつひとつのぞきこみ（ア）ながら、点検しているところだった。中に入りかけたあたしは、もわっとした空気にあわてて身をひいた。機械で熱くなった（イ）空気が行き場をなくして、工場の中がサウナのようになっている。

「また、雑用をおしつけられたんだ……」

あたしは、同情するようにいった。

朝は始業前に行って機械の電源を入れ（ウ）、夕方には機械の点検と掃除をする。日中だって、材料を用意したりはこんだり（エ）、ときには買いものなんかの雑用までたのまれて……それなのに、天馬は文句ひとついわない。

「ちがうよ。だれかにいわれたわけじゃない。オレはまだ、追い回しだから」

追い回し……古くさい言い方だ。

その昔、見習いは先輩のいうことをきいて、あっちこっち走りまわっていたらしい。だから、追い回しという。

直接教わったりせず、技術は見て盗めというのも、そのころの慣習だ。今の時代、そんなことをいったらだれもついてこないだろうと思うのに、天馬は進んでそれを受けいれているように見える。

「こうやって点検していると、機械の構造や細部がよくわかるんだ。作

業をしているときは、そんな余裕もないからさ」

①はじめは、優等生ぶっているだけだと思っていた。でもだんだんと、それが本心であるとわかってきて……。

手先が器用な天馬は、モノ作りそのものがあっているようで、金属を見つめる目は生き生きとしている。

天馬は電源を確認し、重い扉に鍵をかけると表に出てきた。

そして、おもむろに後ろポケットから丸めたノートをとりだすと、縁石にすわって何かを書きはじめる。わずかな明かりが照らすノートをのぞきこんだら、何やらびっしりと書いてあった。

図、グラフ、数字、記号……。あたしにはさっぱりわからないけれど、どうやら仕事に関することらしいとだけは、かろうじてわかった。

「仕事が終わっても勉強？　熱心すぎやしない？」

たまには、息をぬけばいいのに。お父さんの悪口でも、グチでもいってくれれば……と思うけど、あたしじゃ相手にならないのかもしれない。

「毎日、新しい発見があるんだ。だから書きとめておかないと、もったいない」

そんなふうにいわれると、②返す言葉もなかった。

ふと、天馬の指先に目が行った。機械油で黒くよごれている。

「天馬、手をよく洗ったほうがいいよ。そのうち、お父さんみたいに落ちなくなっちゃうよ」

お父さんの指は、お風呂から上がっても黒いままだ。軍手をしているにもかかわらず、染みこんだ機械油が、爪のあいだやしわの一本一本に入りこんでいる。お父さんは気にしていないようだけど、あたしはすごく気になる。そのせいで、小学校に上がるくらいから、手をつながなくなっていた。

天馬はノートを閉じると、はじめて気づいたというように、指先をじっと見つめた。

「そっか。社長の指の油、とれないのか……」

なぜかうれしそうなその顔を、不思議に思う。

「ひとつの技術を身につけるにも、十年以上かかるっていわれてるんだ。オレも、早く社長みたいになりたいよ。そしたら、自分の工場をもって……」

胸がざわついた。

目標にむかって、つきすすむ天馬。

③なんの夢もないあたし。

天馬はどんどん先に行ってしまう。ぜったいに追いつけない。あたしたちの距離は、永遠にちぢまらない……そのことが、なぜかさびしい。

「それより琴葉、オレに用？　どうして家に入らないんだ？」

いわれて、はっと思いだした。お母さんに、帰りがおそいとしかられそうだったから、天馬といっしょに入れば安全だろうともくろんだのだ。

思いだしたら、④余計に情けない気持ちになった。

（工藤純子『てのひらに未来』による）

1 ═線部ア～エの動詞の中から、活用の種類が他と異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

2 ──線部①とあるが、次の文は、琴葉から見た天馬の様子について説明したものである。Ⅰ には、本文中から最も適当な四字の言葉を抜き出して書き、Ⅱ には、二十字以内で、「先輩」という言葉を使って、文を完成させよ。

天馬は、工場での現在の自分の立場を、Ⅰ という古風な言い方で呼ぶうえに、技術は Ⅱ 、という昔の慣習を、進んで受けいれているように見える。

3 ──線部②とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 天馬もたまには休んだり文句を言ったりすればいいと琴葉が思えば思うほど、天馬本人は意地になって仕事をするから。

イ 天馬は仕事や勉強に打ち込みすぎだと琴葉が思うのをよそに、天馬本人は仕事と勉強に無我夢中で取り組んでいるから。

ウ 仕事のあとに勉強を続ける天馬を熱心すぎると琴葉は感じたが、天馬本人の指の汚れから天馬は本気なのだと気がついたから。

エ 息抜きもせずグチも言わない天馬を琴葉が心配する一方で、仕事熱心な天馬本人は、琴葉の言葉にうわのそらだったから。

4 ──線部③とは、具体的には天馬がどうしているということか。琴葉と天馬の違いもわかるようにして、六十五字以内で書け。

5 ──線部④とあるが、これは琴葉のどのような気持ちを表しているか。適当なものを次から二つ選び、記号で答えよ。

ア 自分が天馬に追いつけないことへのさびしさを感じたことで、母にしかられることを急に恐ろしく感じ始める気持ち。

イ 自分からは遠い存在である天馬へのライバル心を感じる一方で、一人で家に帰れない自分をふがいなく感じる気持ち。

ウ 自分と天馬の距離を感じる満たされない思いに加え、人に頼ろうとする自分の弱さに気づいてみじめに思う気持ち。

エ 自分が天馬に追いつけないことへの情けなさで胸がいっぱいで、本来のもくろみを忘れていたことを残念に思う気持ち。

オ 仕事に打ち込んでいる前向きな天馬の姿や言葉にふれたことで、自分の現状を改めて自覚して自信をなくす気持ち。

令和四年七月、政府は全国を対象に、七年ぶりとなる節電要請を行いました。家庭での電気使用量と、節電への取り組みについてのあとの**資料1**及び**資料2**を参考にしながら、次の(1)～(5)の**条件**に従って、あなたの考えを書きなさい。

条件

(1) 二段落で構成すること。

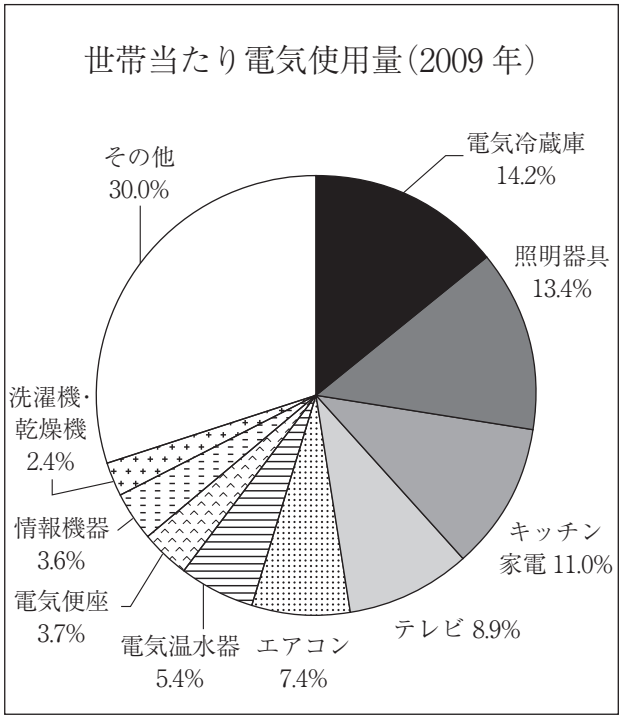
(2) 第一段落には、**資料1**または**資料2**からあなたが読み取ったことを書くこと。

(3) 第二段落には、第一段落をふまえて、あなたが家庭での節電に対してどのように取り組みたいと考えるかを具体的に書くこと。

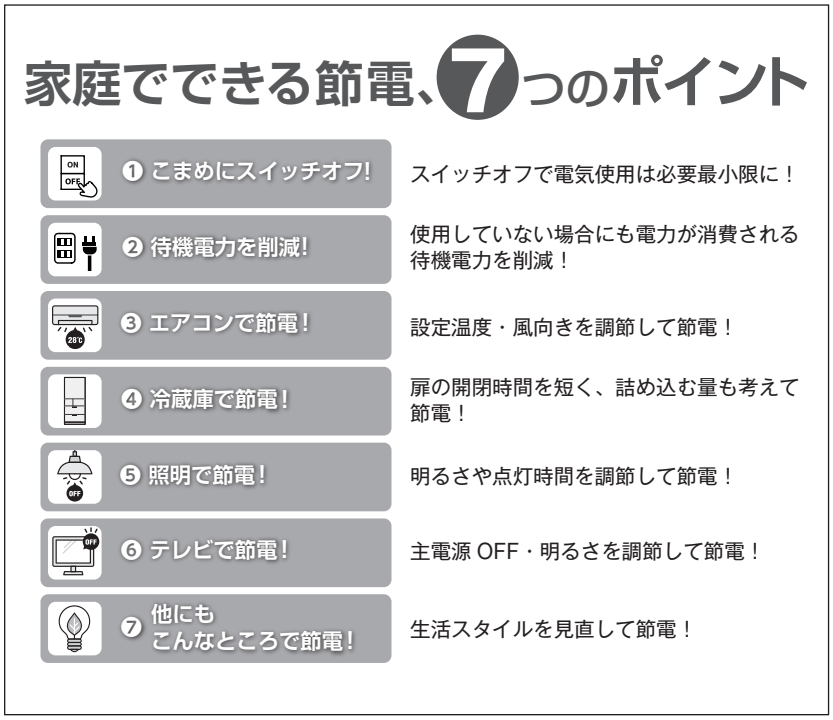
(4) 六行以上八行以下で書くこと。

(5) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。

資料1



資料2



資料1　資源エネルギー庁　平成22年度「家庭におけるエネルギー消費実態について」より作成。

資料2　環境省「みんなで節電アクション！」特設サイトより作成。